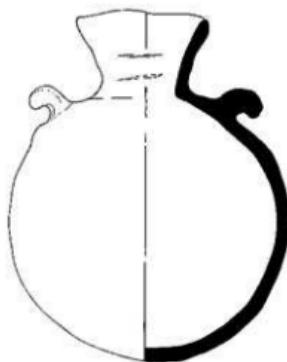


佐井寺須恵器窯跡発掘調査概報

— 大阪府吹田市佐井寺 —



1975年3月

吹田市教育委員会

序

戦後、急速な経済発展をとげたわが国は、高度成長を歓喜し、国民総生産は飛躍的に増大しましたが、開発優先の陰にかくれ、自然の破壊は急激にすすめられ、貴重な文化財が消滅、散逸するという文化的な荒廃を招くにいたったことも事実といえます。

こうした現状を省み、文化の香りゆたかな都市づくりを目標とする本市は、昨年5月、「吹田市民の環境をよくする条例」を制定し、生活環境の改善をはじめ、文化環境の育成、文化的遺産の活用を掲げ、市民とともに文化の継承と創造を図るため、文化財の分野では遺跡発掘調査、文化財補修の助成、文化財パンフレットの作成など、文化環境の整備をすすめてきました。

もとより文化遺産は、個々の時代の断面を物語るのみではなく、とどまることなく脈打つ歴史の証言であり、生きづける人間の未来への足跡でもあります。それは、現在の私たちに人間の尊厳を語りかけ、今後、私たちの子孫に私たち自らが語りかけるため、何をなすべきかを問いかけていますといえるでしょう。

それに応えていくことが現代人の責務であり、そのための環境を醸成していくことが、文化行政の任務であることを改めて自覚し一層の充実を図るため努力を重ねる決意です。

昭和50年3月

吹田市長 橋 原 一 夫

佐井寺は美しい村である。吹田市内の古くからの集落として、閑静で、どことなく気品がある。その集落の南のはずれの山中に、今回調査をした須恵器窯跡があった。

最初の発見者は一市民であった。ある日、ブルドーザーが静かな空気を震わせ、またたく間に小さな山は崩されていった。ただ荒漠とした平地が形成されつつあった。そして、山が全くその面影を失ってしまう寸前、切り開かれた崖面に、窯の断面と、廃棄された土器を包含する黒々とした灰原が現出したのである。

調査は昭和49年4月20日から始めた。崩れそうな崖の表面部分をはぎとり、或いは、竹の根、木の根を掘り起こし、六世紀末の地表を明らかにし、やがて遺物を收拾した。それらの図面、遺物を整理したのがこの報告書である。

地形上、保存が不可能だったので、いまはもう佐井寺の窯跡はない。文化遺産がまた一つ消えた。しかし、一市民の通報により、その窯のほほ全容を把握し、記録に保存できたことは、せめてもの幸いである。今後とも、文化財保護行政に全力を投入する所存ですが、同時に、市民のご理解、ご協力を、お願いする次第です。

おわりに、網干善教関西大学教授をはじめ調査関係者、並びに地元関係者の多くなるご協力に深謝いたします。

昭和50年3月

吹田市教育委員会

教育長 蔡 重 彦

例　　言

1. 本書は吹田市教育委員会が、文化財回廊補助事業として昭和49年4月20日から、同年5月31日まで行った佐井寺須恵器窯跡緊急発掘調査の成果の概要をまとめたものである。
2. 本窯跡については、本市文化財地図に須恵器窯跡 No.45 (S T-45) として記録されたものであるが、本書においては佐井寺須恵器窯跡と呼称する。
3. 本概報の作成は、社会教育課分室で行ない、藤原 学、古川久雄、亀島重則、端野尚史、西川卓志が作業にあたった。
4. 本調査によって出土した須恵器は整理作業を継続中であり、詳細については後に正報告の機会をもちたい。

調　　査　組　織

調査主体者 吹田市教育委員会 教育長 藤 重 彦
調査担当者 関西大学教授・吹田市史編さん委員 細 千 善 教
吹田市教育委員会 社会教育指導員 藤 原 学
調査参加者 鍋 島 敏 也（文化財愛護推進委員）
上 野 英 三（大阪府立千里高校教諭）
関西大学考古学研究室
大阪府立千里高校地歴部

目　　次

1. 調　　査　の　動　機	1
2. 位　　置　と　環　境	2
3. 調　　査　の　経　過	3
4. 調　　査　の　成　果	3
5. 結　　語	11



北よりみた佐井寺須恵器窯跡

佐井寺須恵器窯跡発掘調査概報

1. 調査の動機

佐井寺は千里丘陵線辺より約1km奥入ったところにあり、戦後久しく、大きな開発の影響を直接にうけるようなことはなかった。

しかし、千里山住宅地の拡大化によって西方が開け、昭和34年からの千里ニュータウン造成によって北辺に忽然と住宅地が開け、これと結ぶ岸部～東佐井寺線が集落の東辺をかすめるようになると、徐々にその影響をまぬがれなくなってきた。昭和41年、吹田市開発協会が佐井寺南方の開発に着手し、竹谷団地が造成されるに至っては、佐井寺は片山方面からも直接に開発の波を受けるようになる。本団地の開発の後も周辺の小規模な土取り開発行為は継続的に行われ、ついに、佐井寺の集落を見おろせる丘陵まで押しせまるに至ったのである。この時、ブルドーザーによって削られた崖面に真赤な窯体と巾11mにわたって多量の須恵器と黒色灰を伴う灰原が現出した。



調査前の窯跡

これが今回の調査対象となった佐井寺須恵器窯跡で、昭和48年5月のことである。この報告は土地所有者である花野光倫氏から千里高校教諭上野英三氏に伝えられ、上野氏は直ちに臨地し、現状を確認したのち、市教育委員会に通報された。

市教育委員会は、窯跡部分の土取り工事の中止を要請するとともに、関係者との協議に入ったが、協議が長びくにつれ、崖面に露出していた窯体の崩壊が進み、また、西北の急傾斜面下に民家がある災害の危険が予測され、早急に調査する必要が生じた。

市は昭和49年度文化財補助事業によって調査を行う方針を決定した。調査は先のような観点から梅雨期までに完了する必要があったため、昭和49年度の初頭に開始されるべく体制が整えられた。

2. 位置と環境

佐井寺須恵器窯跡は、大阪府吹田市佐井寺1丁目409番地ほかに所在する。佐井寺は淀川の沖積平野部より西方約1km入り、千里丘陵東南部に点在する集落の中でも最も丘陵部に位置する。

地理的には市内山田と共に湧水点を囲む自然発生集落ということができ、集落の中には市内三名泉の一つに数えられる佐井の清水がある。

また村の中心部に式内社伊射奈岐神社があり、また天平7年、行基の開基と伝える佐井寺がある。

さて、本窯は北方に佐井寺の軒並を見おろす丘陵の西北斜面にある。ここは佐井寺と山の谷を隔てる丘陵が北東にのび、竜ヶ池、駿ヶ池へと支丘陵を配しようとする分岐点にあり、その尾根上部を灰原とするように窯は構築されたようである。既に周囲は開発に



周辺の窯跡分布状況（矢印が佐井寺須恵器窯跡）

よって旧地形を止めず、周辺の微地形は知るよしもない。

わが国においては、府下泉北丘陵で須恵器生産が開始されるのであるが、5世紀末葉に至ってその技術が始めて他地方へ伝播されたという。(註1)

この第1次の地方伝播によって開窯される諸窯跡群の中では、千里丘陵に分布する窯跡群が最大規模を有すると云われている。(註2) その総数は約100基とみられ、そのほぼ半数が吹田市域、千里丘陵東南部に分布している。本市内の窯跡群はその分布状況によって6支群に分けられ、本地域を中心とするものを佐井寺支群と呼ばれている。(註3) 佐井寺支群は本窯のほか6基の窯跡があり、 $1 \times 0.8 km$ の範囲に点在する。これらの窯跡群は、本市窯跡群中でも丘陵最深部に位置し、概して経営期は新しい様相を呈する。特に本窯の北方500mに位置するS T-9 窯跡は藤原宮期に属し、市内の須恵器窯跡としては最もおそらく操業されたものである。

その他の窯業遺跡としては、地徳寺瓦窯(註4)、白頭瓦窯(註5)などの瓦窯跡が丘陵縁端部に点在し、やがて、東方1kmに平安初期に至って平安官用瓦を生産した吉野瓦窯跡群(註6)が成立する。

3. 調査の経過

発掘調査は、昭和49年4月20日から開始した。

調査は、吹田市史編さん委員として市内の遺跡調査を担当してこられた網干善教関西大学文学部教授の指導の下に、本市教育委員会社会教育指導員 藤原 学が現地を担当し、常に関西大学考古学研究室の協力を受けたほか、上野英三氏をはじめとする千里高校地歴部、さらには吹田郷土史研究会員など地元の研究者のかたがたの多くの参加協力を得た。

しかし、調査が窯体のみならず、造成域内の灰原全域が調査対称となつたため、出土遺物は膨大な量となった。しかも、灰原の遺存状況が良好なため4区にわけ、各区で終始層位調査に務め、灰原に多数の日数をかけ、全調査の終了したのが5月30日であった。

なお、5月6日には市民約120名の参加をもって現地説明会を開催し、現場にて遺構、遺物を公開した。

4. 調査の成果

1) 測量調査の成果

調査時点では、東南一帯は既に造成されており、測量調査は、西～北の傾斜面 $20m \times 45m$ の範囲しか実施できなかつた。しかも、西斜面は、奥フジ氏邸造築

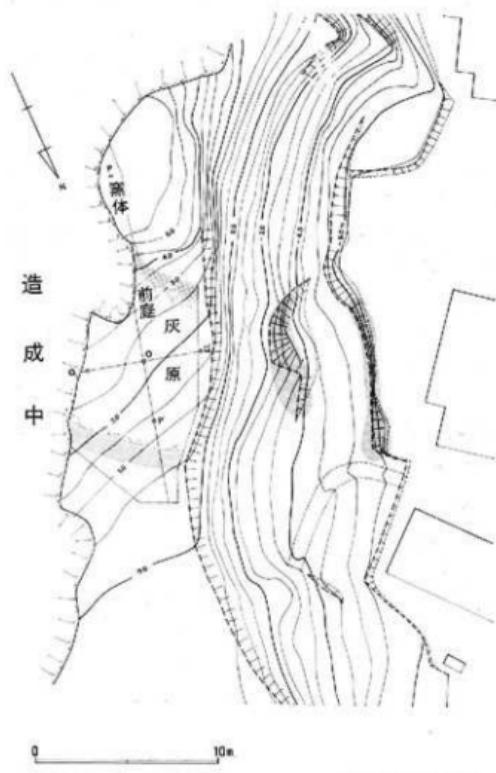


調査前の灰原（北より）

のため、高さ6~13mも削っており、急斜面をなしている。したがって、旧来の地形が保たれているのは、竹藪とっている窓体の主軸にそった巾4~7mの部分のみである。

さて、造成以前の地形図をみると、55.8mのピークが当地点に明記されており、今回の調査地最高位が51.02mであるところから、丘陵頭部は既に造成により失われていると思える。丘陵帽を現在の千里山~佐井寺線道路上と仮定すれば、本窓の構築された丘陵は、比高22.3mの丘陵といえ、このうち、窓体基底部が、標高47.01mであるから、丘陵斜面のかなり上部に窓を構築したことになる。

さて、灰原の範囲は、末端を後世の造構によって削られているため、明らかでないが、地形実測の時点で



窓跡周辺地形実測図

地表に灰原を認めうる範囲をみると、東西12m、南北12mといえる。東側の今回の造成によつて破壊された範囲は推定もつかず、また、西斜面に関しては、奥フジ氏邸造成の際に流されたとも解せるため、いずれにしても灰原の広がりを決めることが困難である。奥氏邸の全面にわたって、須恵器、灰が認められ、同氏邸造成に際して、かなりの部分の灰原の散逸があったと推定される。



窯体横山状況

2) 窯 体

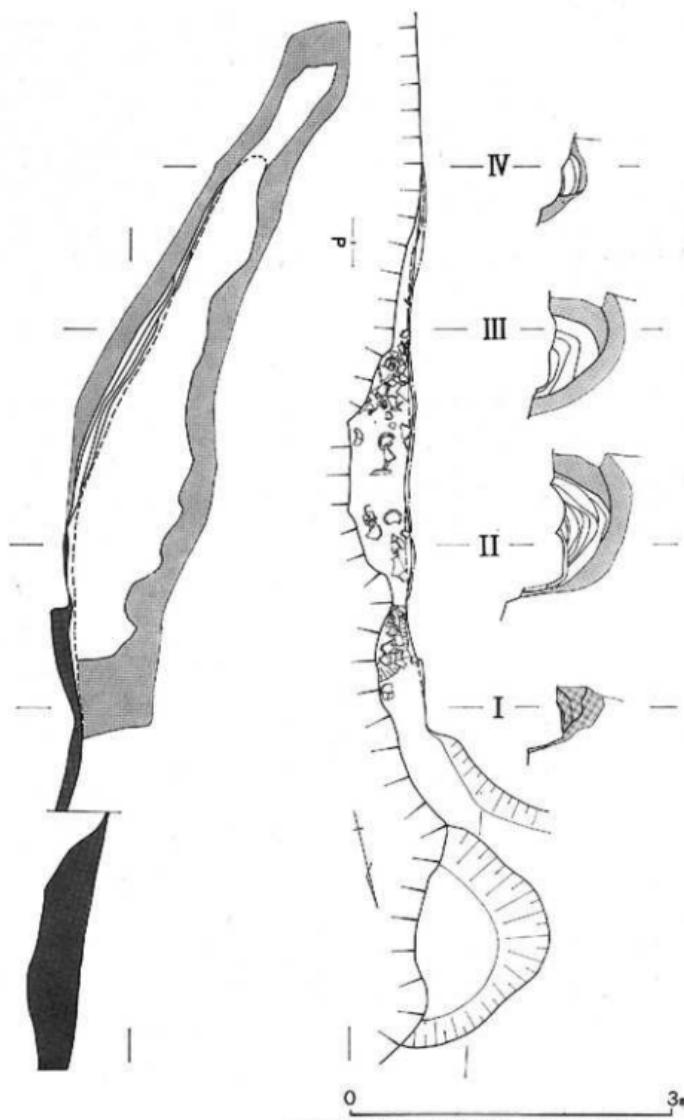
窯体は、主軸方向に破壊されるという最悪の遺存状態であったため、調査途中においても崩壊がすみ、調査は困難をきわめた。図でも明らかなように、窯体主軸断面図もとれず、したがって、主軸断面はすべて調査時点での見とおし図となつた。

遺存部での計測結果で述べると、窯体長 $6.3m$ 、窯体最大巾 $0.6m$ 、窯側壁高 $1.0m$ である。焼成部窯床傾斜は 30° で、燃焼部はほぼ平坦である。窯体の型式からいふと、半地下式無段無階登窯である。断面図では、燃焼部において約 $15cm$ の段がつくが、これは、有階式登窯でみられるようなものではなく、舟底とよばれる燃焼部の一施設と考えたほうがよい。窯床にはスサ入り粘土を貼りつけているが、最も多いところで3枚の床を検出できた。

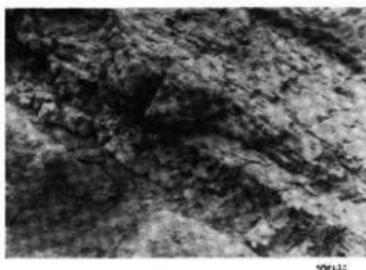
窯壁は横断面で明らかなように、複雑な様相を呈するが、最古の段階の地山焼土層が全断面図に残されており、したがって、徐々に内側へ壁を塗り直しながら、窯の維持にあたってきたことがわかる。側壁は第3横断面図で11面をかぞえるが大きくみると、構築以後2回の窯の大規模な補修があったとみるべきであろう。



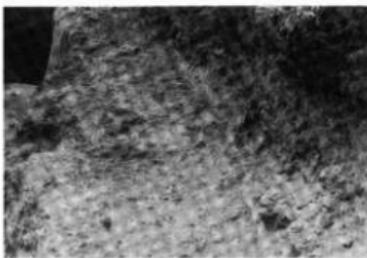
窯体内須恵器出土状況



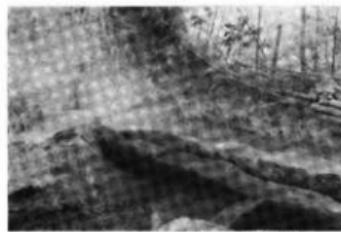
瘤体炎測図（左より主軸断面図、平面図、横断面図）



窯床



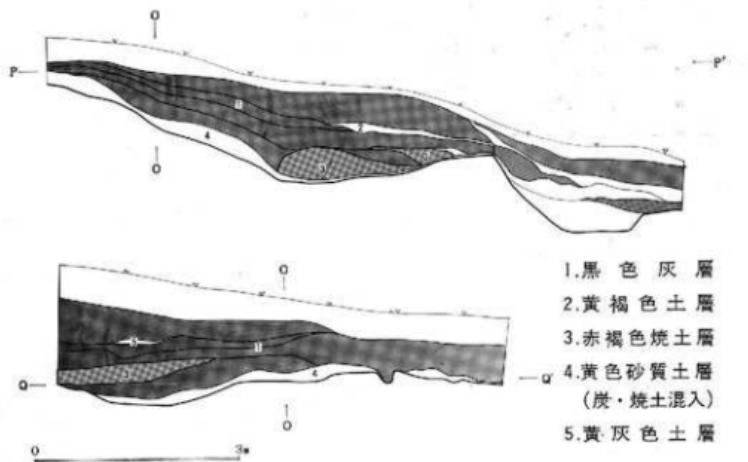
窯床検出状況



前庭部ピット検出状況

3) 前 庭 部

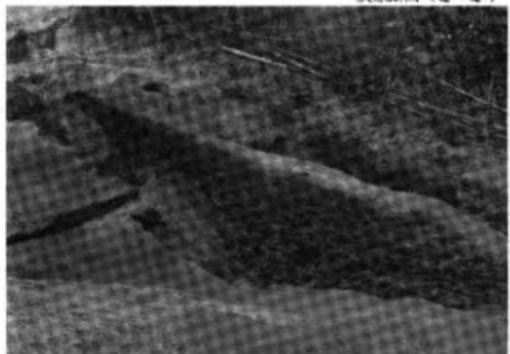
焚口の前方、窯詰や窯出しの諸作業の場となる平担面を前庭部というが、本窯では、焚口前方約3mがこれにあたると思われる。この部分には、径約1.1m程度、深さ40cmのピットがあり、この中に黒色灰が充満していた。前庭部の大半が既に破壊され、詳細は不明である。



灰原土壌断面図



灰原断面 (Q-Q')



灰原断面 (P-P')

補修が行われたためであろう。またこの灰原は全体として西北方向に流されているが、部分的には地山の変化によって、V字形の小谷に堆積した個所があり、この部分では灰層が良好な状態で遺存しており、特記すべきであろう。

5) 出土遺物

出土遺物は須恵器が大部分であるが、灰原内出土木炭、窯壁塊等も参考資料として若干採取した。

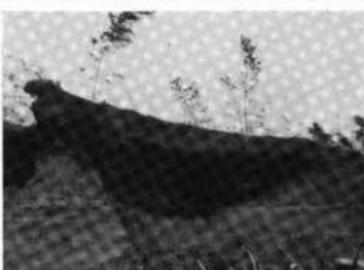
出土須恵器は、灰原をほぼ完掘したために膨大な量におよんだ。杯・杯蓋・高杯・碟・提瓶・平瓶・器台・短頸壺・長頸壺・甕・褐

4) 灰 原

全体を、主軸を中心にして4区にわけ、各区で層位調査を行った。先述したように、灰原の範囲も不明であり、ここでは、主として土層断面により述べる。

主軸断面(P-P')では、前庭部を過ぎると、地山が急激に落ち、灰の堆積が厚くなって、最大厚1.3mの灰原を形成する。ところが焚口前方15m付近で急激に上からの層位の乱れがあり、この層の最下位で磁器片等が出土している。これにより、本窯の灰原も、その最上位は後世の擾乱をうけていることがわかった。

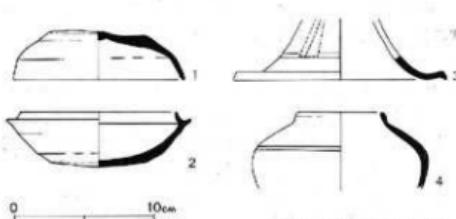
灰層は、下層で厚い焼土の堆積層があり注目される。窯体断面の観察で述べたように、本窯の大規模な



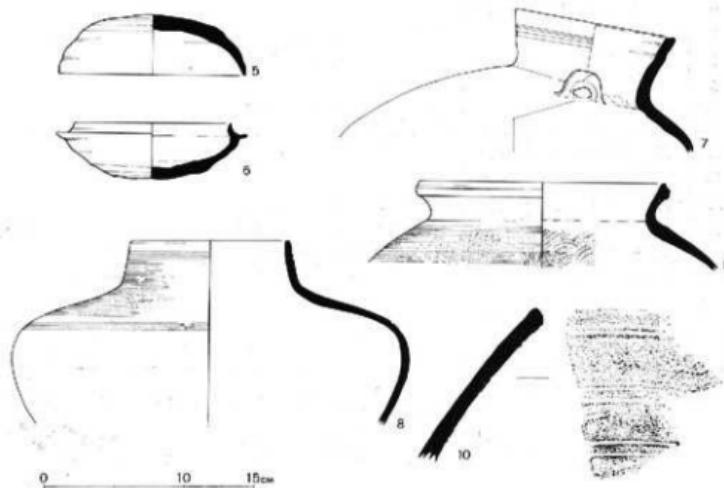
灰原堆積状況 (調査前)

鉢等の器種がみられ、中でも杯・
杯蓋・壺が大半をしめる。

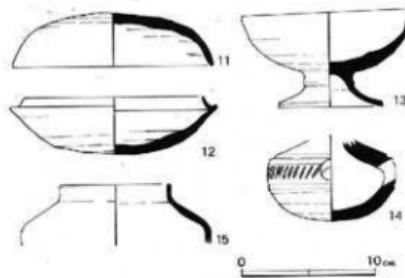
これらの須恵器から、出土位置
により、窯体内に遺存した閉窯時
における製品と考えられる須恵器、灰原の中でも最も新しい最上層
の須恵器、そして、開窯時の製品
で本窯須恵器の最古段階を示すと



窯体内出土須恵器実測図



灰原上層出土須恵器実測図



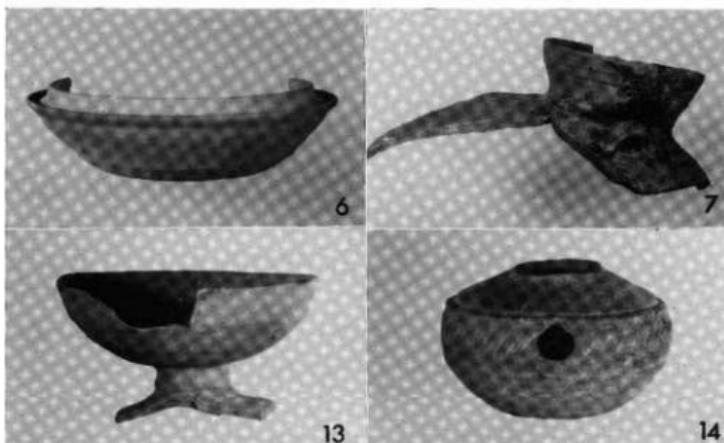
灰原最下層出土須恵器実測図

思われる灰原最下層の須恵器を個別に抽出した。そのうち、ごく少數ではあるが大勢を知ることのできるものを選んで実測を行ない、その所見を表に示した。

出土須恵器を概観すると、灰原最上層出土のものは形態上窯体内の須恵器に類似し、その他の灰原出土の大部分はむしろ灰原最下層のものに近い。これにより、前者が本窯の終末期におけるごく短期間

の製品であることは明らかであろう。また、器種別に見ると平瓶・提瓶の出土が目立ち、この窯の特色を端的に示しているようである。

番号	器種	器径 cm	器高 cm	所見
1	杯蓋	12.3	3.5	天井部がヘラによって鋭利に切られている。
2	杯	13.3	3.9	底部仕上げは杯蓋(1)に類似する。
3	高杯脚部	15.2		通しの数は不明
4	短頸壺	12.6		頸部の退化が著しい。
5	杯蓋	13.4	4.3	
6	杯	13.6	4.0	
7	平瓶			肩部に環状の耳が付く。かなり大型の平瓶である。
8	短頸壺	28.4		大型の短頸壺、口縁、腹部肩に凹線が廻る。
9	小型壺	17.4 (口径)		
10	大型壺			粗雑な波状文が施されている。口径不明。
11	杯蓋	15.1	4.0	
12	杯	15.5	4.3	
13	高杯	12.9	7.2	低脚高杯、脚は無意で、凹線が廻る。
14	壺	9.6		文様帶に斜列点文が廻る。凹線、底部の仕上げなどは丁寧である。
15	短頸壺	14.2		短頸壺(4)に比べ、頸部がしっかりしている。



出土須恵器（番号は上記表に相応する）

5. 結 語

佐井寺須恵器窯跡については、先に『千里古窯跡群』に若干の資料が掲載されている。この資料は昭和48年5月に土取り工事によって一部が破壊された際に、上野英三氏によって収集されたものである。したがって、本窯の操業期については、調査前の段階では、ある程度の判断が可能であった。ただ窯体、灰原に対する今回の調査によって、本窯操業期とその経営の実体をさらに詳細に解明することが出来たといえよう。

先の「出土遺物の所見」で明らかのように、本窯出土須恵器を概観すると、操業期間内に明らかに型態変化が表われている。例えば杯、杯蓋では(1・2)、(5・6)、(11・12)が好例で、時期的に下降するにしたがって、器形の小型化、底部仕上げの粗雑化が明らかである。これを森浩一氏による須恵器編年によると、(1・2)、(5・6)はⅠ型式後半、(11・12)はⅡ型式中葉といえよう。(註7) したがって本窯は須恵器Ⅰ型式中葉に開窯されたといえ、実年代としては6世紀中頃である。さて、閉窯期であるⅡ型式後半については森氏は、7世紀初頭まで存続したと述べておられる。(註8) 本窯ではⅡ型式後半の遺物は窯体内、及び灰原の最上層に限られ、この型式の製品の生産は閉窯に至る直前段階と考えており、閉窯期は6世紀末葉であろう。ただ、窯体に対する度び重なる補修、大規模な灰原などから考えて、比較的長期にわたる操業を行っていることは明らかである。

本市における須恵器の窯跡に関しては、学術調査されたものも既に何基かあるが、灰原に対してこれほど大規模な調査を行ったことはなく、その意味でも、出土須恵器の最終的な整理作業の成果が待たれるわけである。しかもこの時期は、須恵器がちょうど古墳時代から歴史時代への急激な変遷を始める時期でもあり、本窯操業期間内の器種の消長、器形の変遷の意味するところは大きい。例えば、特に本窯出土須恵器の中でも挺瓶、平瓶が注目されることを述べたが、この時期は前者から後者への変遷の時期でもある。製作技法の上からも密接な関係をもつ両器種の変遷は、単なる型態上の問題に留まらず、須恵器使用者層の意識と、それを技術的に受け立つ陶工人の姿勢の問題として興味あるところである。同様な点についても、他の多くの器種についても考えられねばならず、それだけに今後の整理作業の完結を待たねばならない。

いずれ、本報告の場でその成果を公表できることを願って概要報告を終りたい。

末尾になったが、本調査の遂行にあたって、花野光倫氏をはじめ、地元関係者からは常に多面にわたりご援助をうけた。深く謝意を表したい。

- 註 1. 田辺昭三 「須恵器生産の諸問題」 美術工芸 392. 1971
2. 横山浩一 「土器生産」 日本の考古学Ⅶ 1966
3. 錦島敏也・藤原 学 「千里古窯跡群」 1974
4. 吹田市教育委員会 「吹田市文化財図 No. 27」 1973

5. 大阪府教育委員会 「吹田市山田・白頭推定瓦窯跡の調査」 1967
6. 大阪府教育委員会 「岸辺瓦窯跡発掘調査概要」 1968
7. 伊達宗義・森 浩一「土器」 日本の考古学V 1966
8. 森 浩一「須恵器からみた終末期の年代—あとがきにかえて—」
論集 終末期古墳 1973

佐井寺須恵器窯跡発掘調査概報

昭和50年3月31日

編集・発行 吹田市教育委員会
大阪府吹田市泉町1丁目3番40号
